

### 本学学部生と教員が参加 環境省“ぐるぐるプロジェクト”キックオフイベント

本学医学部学生、医学部放射線健康管理学講座坪倉正治主任教授及び保健科学部診療放射線科学科五月女康作准教授は、令和3年7月15日（木）、神田明神ホール（千代田区）で行われた、環境省“ぐるぐるプロジェクト”キックオフイベントに参加しました。

このプロジェクトは、東京都民を対象とする調査から、放射線の遺伝的影響が起きる可能性が高いと考えている人が40%いる現状を2025年までに20%に減らすことを目標として、放射線の健康影響に関する情報を読み解く力と風評に惑わされない判断力を身につける場を創出するために発足しました。今後複数年をかけて、全国の学生も参加するさまざまなプログラムが展開されます。

#### 放射線の健康影響について講義

キックオフイベントでは、小泉環境大臣がプロジェクト概要の説明を、坪倉正治主任教授が放射線の健康への影響についての講義を行いました。講義に先立ち、五月女康作准教授が監修を務めた漫画「ラジエーションハウス」（原作：横幕智裕、漫画：モリタイシ 集英社『グラウンド

ジャンプ』にて連載中)で描かれた一場面が、プロジェクトのテーマである遺伝性影響への不安について考える参考になるものとして紹介され、坪倉正治主任教授は震災後の福島県では先天奇形・先天異常等の発生が全国調査との差がなかったこと、放射線の健康影響は被ばくの有無ではなく、受けた量を知ることが重要であることなどを分かりやすく解説しました。

講義に参加した本学学部生らは、科学的知識についての理解を得るためのコミュニケーションのあり方などについて、それぞれに思いを述べました。

#### 今夏から本格活動

“ぐるぐるプロジェクト”は今夏から本格的に活動をはじめます。①知る（論文を科学的に読み解く）、②学ぶ（ラジエーションカレッジ）、③決める（情報提供と意思決定）、④聴く（不安や疑問によりそう）、⑤調べる（ぐるぐるプロジェクト公式ホームページ）の5つの事業について



写真上段向かって右側上部から時計回りに、本学医学部 楯和馬さん、同 神田正樹さん、同 木下瑠菜さん、福島学院大学吉原みさき様、写真下段左から玉川大学大学院山重恵美様、五月女康作診療放射線科学科准教授、玉川大学大学院市川秋音様、小泉環境大臣、坪倉正治放射線健康管理学講座主任教授

で戦略的に活動を進めていく予定とのことなので、詳しくは環境省HPをご覧ください。また、キックオフイベントの様子は、環境省動画チャンネル (YouTube) で既に公開されています。併せてご覧ください。

#### ■ぐるぐるプロジェクトホームページ



#### <参加学生による感想>

医学部5年生木下瑠菜さん  
「確率を抽選に例えた分かりやすい説明は、受け手も理解しやすいと思いました。子どもたちに健康について教えるプロジェクトでも、子どもたちがどれくらい知識を持っているのか、それに対してどのように教えたら伝わるのか、伝える技術を向上させ、相手がどんな情報を求めているのか、何が伝わりにくいのか、情報発信を一方的ではなく双方向のコミュニケーションを取りながら行うことが大事だと思いました」

医学部5年生神田正樹さん  
「DNAの修復機構や放射線のことは高校、大学を通して学んできました。科学的知識をいかに分かりやすく伝えるかが重要だと思います。子どもたちが正しい知識を学べば、子どもから家庭に広がり、それが常識となり新たに伝わるのではと考えます。科学的知識と福島で生活している思いの部分の両方の立場から物事を考えて、正確な情報をどう発信したらいいかを考えていくことが大切だと思いました」

医学部4年生楯和馬さん  
「放射線に関しても、新型コロナウイルス感染症も人の目に見えないものである。その人の目に見えないものをどのように伝えるか、そこが重要だと思います。小泉環境大臣がお話しされたように、現状を知ることが今の世の中で求められていることなので、ただ安全なのかどうかの数値だけではなく、どのように安心を伝えられるか、情報発信の方法を今後も考えていく必要があると考えました」

### 「スポーツによるケガや故障」をテーマに、いごころVol.22を発行

広報コミュニケーション室は令和3年7月16日「広報紙いごころVol.22」を発行しました。

「いごころ」は県民の健康啓発を目的に年に4回発行しており、主なターゲットは県内の高校生です。県内全ての高校を通して約5万人の高校生に配

布しています。今号では「スポーツによるケガや故障」をテーマに、ケガをした際の応急処置や、故障を減らすための予防、スポーツを長く楽しむうえでの注意事項などを紹介しております。ぜひ、ご一読ください。



### IgA抗体を利用した ウイルス吸着マスク (IgA抗体マスク) 開発

令和3年7月20日（水）、本学医療-産業トランスレーショナルリサーチセンター（以下、「TRセンター」）は、新型コロナウイルス感染症回復者血液から取得したIgA抗体を利用し、ウイルスを吸着するマスク (IgA抗体マスク※1) を開発※2しました。

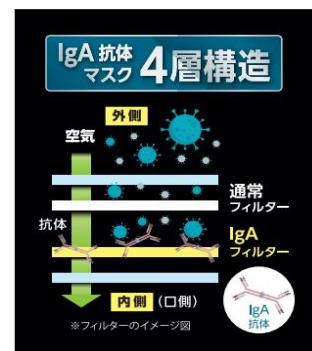
TRセンターでは、経済産業省が支援する福島復興プロジェクトによって得られた成果（タンパク質マイクロアレイ技術）を活用し、新型コロナウイルス感染症の抗体医薬品の研究を進めてまいりました。

本年4月には、新型コロナウイルス感染症回復者血液から新型コロナウイルスに対するIgA抗体の遺伝子取得に成功し、抗体医薬品開発支援の成果をいち早く社会還元するために、抗体を含む衛生用品等の開発を行うことを発表いたしました。

そしてこのたび開発しましたウイルス吸着マスクの特長は、IgA抗体を含む「IgAフィルター」と通常フィルターとで構成される4層構造からなり、IgA抗体がウイルスを強く吸着し、体内への侵入を防ぎ※3ます。抗体の大きさはウイルスよりもさらに小さく、IgAフィルターには1cm<sup>2</sup>あたり10億個以上存在します。

TRセンターでは、今後も医薬品開発支援や、抗体薬および衛生用品の実用化について、引き続き研究・開発を進め、新たな進展がありましたら改めて発表を行う予定です。

- ※1. 特許出願中 ※2. 試作品につき販売については未定
- ※3. マスクはウイルスの侵入を完全に防ぐものではありません。



### 乳腺外科学講座研究グループ 2021 Best Paper Awardsを受賞

本学乳腺外科学講座岡野舞子博士研究員ら研究グループが2019年に発表した論文「Triple-Negative Breast Cancer with high levels of Annexin A1 expression Is associated with mast cell infiltration, inflammation, and angiogenesis」が、International Journal of Molecular Sciences (以下「IJMS」)において、2021 Best Paper Awardsを受賞しました。

2019年にIJMSに発表されたすべての論文の中で、編集委員で構成された委員会が「科学的メ리트と幅広い影響」や「研究目的および/また

は提示されたアイデアの独創性」、「2020年の引用率とダウンロード率」などの観点から考慮し、3件のレビューと3件の原著論文を選出したうちの原著論文1件に見事選ばれ、この度の受賞となりました。

本論文は、アネキシンA1 (リン脂質結合タンパク質) がトリプルネガティブ乳癌の予後不良因子に関連しているという以前発表した内容に関連したものであり、これはアネキシンA1が肥満細胞の浸潤と、トリプルネガティブ乳癌の攻撃的な表現型に関連する炎症に関連していることを示す最初の研究とされています。

受賞にあたり、岡野舞子博士研究員は「大学院生からの研究課題をこのような形で認めていただけたことを大変嬉しく思います。ご指導いただいたロズウェルパーク癌研究所高部和明教授、本学大竹徹教授、ご支援くださった諸先輩方、乳腺外科学講座の皆さまに感謝いたします。今後も臨床業務の傍ら研究を続けていきたいと思っております」とコメントしました。

論文はこちら  
からご覧いただけます。



### 保健科学部後援会 設立総会開催

令和3年7月25日（日）、保健科学部後援会の設立総会が、本学福島駅前キャンパスにおいて開催されました。会には、委任状での出席も合わせて112名の保護者の皆様に参加。後援会規約や活動内容案について審議が行われ、満場一致の承認を受け保健科学部後援会が設立されました。

後援会の事業としましては、学生会活動や課外活動への助成などの学生の福利厚生援助事業のほか、国家試験対策、臨床実習における旅費等

の支援、大学行事への助成などの教育研究協力事業等、学生生活に関わる各分野において、きめの細かい支援を行っていくことが議決されています。

今後、保健科学部後援会は、医学部、看護学部の後援会、本学の教職員と連携・協力しながら、大学及び保健科学部の発展に向けた取組を進めていくこととなります。心強い応援団の誕生により、歩みを始めたばかりの保健科学部の歴史に、また新

たページが加わりました。



第1回後援会参加者による集合写真